

①はじめに

私がこのテーマにした理由は、舞姫を読み終えたときに頭の中に浮かんだのが舞姫の続きとその結末だったからだ。舞姫は、主人公豊太郎のいろいろな感情が生々と書かれていて、これまでに授業でふれた近代文学とよく似ているという印象をうけた。その中でも特に似ていたのはこころだったと思う。こころでは K が自殺し、その後先生が自殺した。私は舞姫を読み終えたときすでにこころとオーバーラップしていたので、K をエリス（ただし自殺ではなく精神病）、先生を豊太郎として日本に帰ってから豊太郎が自殺する設定でそれまでの豊太郎を豊太郎自身の目線で遺書として書いた。

②続・舞姫

もう僕がエリスと離れてから十ヶ月が経った。

僕は今自分がすべきことは終わったと感じている。周囲の人にとってはひどく勝手な話かもしれないが、僕は自分で自分を殺すことにする。僕が接している人たちは、僕が日本に帰ってきてからはいたって順調な人生を歩んでいると思っているひとが多いだろうが、そうじゃない。相沢、君は出世ばかりを気にしているから僕がなぜ死ぬのかなんてわからないかもしれないが、僕が遺書を遺せるのは君だけだ。君は僕の過去を知っていて、僕の人生を変えた、太田豊太郎という人生にもっとも近い男だからだ。

君も知っている通り、僕は日本に帰ってからは必死に学問に努め、大臣やその他の上官に誠実に応対してきた。それに留学での経験も合わせて今ではドイツへ行く以前よりも良い地位で働かせてもらっている。ありがたいことに、それなりの収入もある上、僕は富貴な生活に興味がないからエリスへ仕送りをしているにのしかかわらずすでに多額の金を貯めることができた。君はこれは全て君が僕を日本へ連れ帰ったおかげだと鼻を高くしているようだね。

君はあっちにいるときからエリスのことをあまりよく思っていなかったようなので伝えていなかったが一ヶ月ほど前にエリスの母から僕に手紙が届いた。日本に帰ってきてからエリスの母からの手紙は一度もなかったが、僕はその一度目の手紙で喜びと悲しみを同時に味わうことになる。その手紙には僕とエリスの子供が無事に生まれたことが書かれていた。少し小柄だが元気な男の子で、瞳の色はまだエリスが僕を愛していたときに望んでいた僕とおなじ色らしい。エリスはその恨むべき瞳を、長くみせなかった幸せそうな笑顔で見つめた後、残念なことに息をひきとった。学問や職業における僕でなく、初めて僕という存在を愛し信じてくれた人が自分の

世界から消えて、僕は僕という存在がますますわからなくなった。医者は精神的に強いダ

メーががあった上やせ細った身体での出産で身体が耐えられなかったのだろうという。僕はエリスを殺してしまった僕自身、そして君を恨む。

エリスにとって僕と出会ったことは間違いなく不幸だっただろうけれど、僕にとっても不幸だったのか、それとも幸せだったのか。僕はエリスと出会って多く悩むことになったが、おそらく不幸ではなかっただろう。不幸だったのは僕が自分というものの意思を持っていなかったこと、そしてそれに気づいてしまったことだ。

僕は本当に自分の意思を持っていなかった。いろいろなことに左右されて自分のやろうとすることが定まらなかった。しかし日本に帰ってからはそうじゃない。先にも述べた通り、僕は学問や職で成功を収めることに努め、それは周りから見ればドイツへ行く以前の僕と何も変わらないかもしれないが、僕自身は違った。僕はこの十ヶ月間、エリスを愛する気持ちと金を稼ぐことを信念とした。また違う形でエリスのような犠牲者が出るかもしれないし、自分自身自由に生きる権利などないとわかっていたからもう自分を探すのはやめた。

努力と儉約のおかげで貯まった金は子供を何年か育てるには十分な金額だろう。この金はすでに何冊かの本と、僕がドイツから帰る途中、サイゴンで船の中にいるときに書いた手記と共に子供宛でエリスの母に送った。本については、エリスも僕も読書を好んだからおそらく子供も多くの本を読むだろうと思いついて送った。ただエリスの母にはよみたがるときだけ読ませてやってほしいと伝えた。無理に何かをさせられれば僕のような大人になるかもしれないからだ。手記については、子供が大きくなったとき僕やエリスのことを知れるように、僕からエリスや子供への謝罪の気持ちをこめて送った。ただの言い訳になるかもしれないが、僕が弱い人間だったことがわかってもらえるだけで十分だ。

僕の日本に帰ってからの目的は子供にこの贈り物をするだけだった。それもこの一ヶ月だやり終えて、僕はもう生きる意味を失くした。君がほしがる地位や名声を手に入れた僕が、なぜ自殺するのか、君はこれを読んでもまだ分かっていないかもしれない。でもこれを僕が生きた証として誰かに読んでほしかった。

僕にこんなことを言う権利はないとわかっているが、一目子供に会いたかった。

僕は僕というものを見つけられなかったけれど、僕の人生は僕にしかない劇的なものだったようだ。

太田豊太郎

③まとめ

私は、先に「舞姫を最初に読んだとき、つづきと結末が思い浮かんだ」と書いたが、私の書いた内容は初めに思い浮かんだものではない。豊太郎が自殺することや遺書を遺すストーリーは変わらないが、最初は豊太郎はサイゴンの船で自殺し、船で書いた手記を遺書に

するのだろうと感じていた。しかし舞姫を読み込んでいくと、周りのひとは豊太郎を理解しておらず自分のことを他人に遺書として教えるとは考えにくく、相沢への遺書だとすれば相沢は豊太郎のことをよく知っているからもっと簡単でよいと思う。だから手記を遺書にすることは考えにくく、それならドイツにいる間に書いてドイツで自殺すればいい。だから豊太郎が日本に帰ってきた意味を加えて考え直した。

次に、豊太郎自身の視点としては詳しく書けなかったのが、なぜ相沢に遺書を遺したかということとエリスが死ぬというストーリー設定にした理由である。

・なぜ相沢に遺書を遺したか

豊太郎は森鷗外と多くの共通点をもつ。特に「舞姫」のストーリーは鷗外がドイツに留学しそこでエリーゼに恋をしたが日本に帰ってくる、という過去によく似ている。現実ではエリーゼは鷗外を追って日本に来るが鷗外の親族によってドイツへかえされてしまう。私は、鷗外はそんな親族やそれを止められなかった自分、またその行為をさせる時代そのものを批判するために舞姫を書いたのではないかと思う。実際に、舞姫は時代にそぐわない若者の話でありながら多くの人に受け入れられた。鷗外は豊太郎（自分）のような人物でも人をひきつけることができるとか、自分は時代からは批判されるような恋をしたけれど世の中に認められる作品を書けるという点で時代を批判したのだとおもう。だから私は時代の象徴とも言える相沢に、豊太郎からの憎しみを伝えることで、鷗外自身の時代を批判する気持ちを表せるのではないかと思い、相沢へ遺書を書いた。

・エリスが死ぬというストーリーにした理由

相沢へ辞書を遺した理由で書いた通り、この遺書は鷗外自身が自分や自分の行動の背景にある時代を批判したと設定したい。エリスは死ぬ設定にしなくても豊太郎が自殺することには変わりはないが、エリスは死ぬほうが自分（豊太郎）や時代（相沢）への恨みをより強めることができるので、エリスが死ぬ設定にした。